

倫理 第30回 「デカルトの思想は合理論」

○今回のポイント

精神と物体を切り離した物心二元論によって、機械論的自然観が生まれ、科学技術が発展する要因となった。

4編2章3節3項1目 コギト・エルゴ・スム [① デカルト]

・人間・・・「確実なもの」、「確実であること」を求める。

↓

・デカルトの登場・・・[② 明晰判明な原理]を探し求める。

→ だれにとっても、どんなときでも確実で疑い得ない原理

・どうすればいい？ 方法 How to! 「可能なかぎりすべてのものを徹底して疑う」

↓

・[③ 方法的懐疑]・・・確実な原理を求めるために疑わしい一切のことを疑うこと

☆ [④ コギト・エルゴ・スム] 『私は考える、それゆえに私はある』 (=我思う故に我あり)

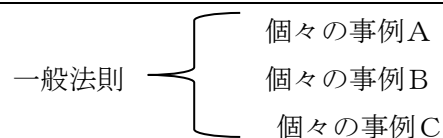
私が一切を虚偽であると考えようと欲するかぎり、そのように考えている『私』は必然的に何者かであらねばならない

4編2章3節3項2目 合理論と理性的人間観

・「哲学の第一原理」・・・いかに疑ってみても疑い得ないものは、疑っている自己の存在。思考する自己、理性、良識のはたらきがあること。

・[⑤ 良識]・・・物事を正しく判断し、真と偽を識別する能力。この世で最も公平に配分されているもの。

・[⑥ 演繹法]・・・理性によって正しいと判断された確実な原理を出発点とし、論証を積み重ねることによって、すべての知識を論理的・必然的に導き出す方法



☆個々の事例を検証して一般法則を導き出すことが[⑦ 帰納法]

例) 三角形Aも三角形Bも三角形Cも四角形A、四角形B、四角形Cの2分の1である

↓

公式：底辺×高さ÷2

☆一般法則により論証して個々の事例にあたるのが[⑧ 演繹法]

三角形の面積を求める公式は底辺×高さ÷2である

↓

三角形A、三角形B、三角形Cの面積

[⑨ 合理論]・・・確実な知識の基礎として、万人に共通する生得観念を認める立場のこと。

4編2章3節3項3目 精神と物体 物心二元論

(1)物心二元論

- ・自我…思考する精神であり、精神とは他に依存することなくそれ自体で存在する実体



- ・思考する精神により認識される自然や事物は、精神の産物にすぎないか？



- ・外的存在も確実に実在する。認識される客体は、精神とは異なる物体(物質)。



- ・**[⑩ 物心二元論]**…物体と精神は、それぞれ独立的に実在するもの(物体)であるとするデカルトの立場。精神的な思惟を属性とする自我と、空間的な広がりである延長を属性とする物体とをそれぞれ独立した二つの実体と考える。

- (2)**[⑪ 心身二元論]**…物体は人間の意志や神の意図と切り離されたものとして、物理的な因果法則のなかで運動するので、思考する精神が認識の対象とするかぎり、人間の身体、自己自身の身体すらもたんなる物体にすぎないことになるという考え方。



- ・**[⑫ 機械論的自然観]**…人間の身体や、自然現象を、作動する精巧な機械をモデルにしてとらえる。

cf1.**[⑬ 生命的自然観]**…物体に霊的なものが宿っているとする考え。

cf2.**[⑭ 目的論的自然観]**…事物はある意図によって変化・発展するというアリストテレスの考え。モノを載せるための机として木材は加工される。

①木材＝机の可能態(潜在的な机)⇒**②**机の始動因(加工作業)⇒**③**机の現実態(実際に作られた机)⇒**④**机の目的因(モノをのせたり書いたりする道具)

(3)**[⑮ 心身合一体]**

心と体を別物と主張してきたデカルトであるが、エリザベート女王に「精神が身体に影響を与えるのはなぜか」と問われ、心と体のつながりについて考え始める。



欲望、愛、憎、喜び、悲しみ、驚きなどの情念は、身体から起こるものを精神が受容した状態



精神が乱れ、行動が束縛される



身体と連動した情念を統制する必要！！



[⑯ 高邁の精神]

道徳における理性のはたらきであり、自己を尊重する気高い心、自己自身への誇り(教科書の説明より)。デカルトによれば、みずからの自由な意志によって情念を支配できる、理性的な自由な精神をさす。デカルトはみずからの自由な意志によって、外部の影響から生まれた受動的作用である情念を制御し、最善と判断したことを実現しようと意志することが、高邁の精神であると説いた(山川の用語集の説明より)。